

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23650551

研究課題名(和文)新しいネットワーク型幼稚園研修システム開発の基礎研究

研究課題名(英文)A Basic Research on the New Network Program Development for Kindergarten Teacher Professional Development

研究代表者

浅田 匡 (ASADA, TADASHI)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：00184143

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円、(間接経費) 840,000円

研究成果の概要(和文)：ネットワーク型の幼稚園研修システムの開発をめざして、複数幼稚園の教師からなる研究会を組織し、ネットワーク上のリソースとして指導案及びビデオクリップの有用性を探った。その結果、いずれも教師の保育実践に関する知識や信念、あるいは保育観の問い直しに有用であることが示唆された。しかしながら、その教師間の相互作用には批判的な問いかけが必要であり、本研究では大学教員がその役割を果たした。ネットワーク型研修システムにおいてリソースとして指導案およびビデオクリップのデータベース化と教師間の相互作用におけるマネジメントの役割が必要要件であることが示された。今後、個々の具体的な問題に対応することが課題である。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to explore the availability of a lesson plan and a video clip as a resource for in-service teacher training network program in order to develop the network system among some kindergartens through ICT. The results showed that a lesson plan and a video clip serve teacher professional development as a resource. Teachers interacted among one another about their practice, beliefs, and something related to their practice. However, in the process of discussion among teachers, someone who takes the role of asking them critically about practice or a lesson plan would be required because each teacher tended to speak about his/her practice based on own kindergarten context. The future research is to explore how to match individual tasks with resource based on the individual kindergarten context because teachers from different kindergartens participate in this program.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学

キーワード：幼稚園研修 教師の職能発達 ネットワーク 指導案 保育ビデオの活用 研修組織 メンタリング

1. 研究開始当初の背景

わが国において教員の資質向上は、学校教育の質の保障・改善において重要な課題である。しかしながら、幼稚園においては教員数が10名未満と少なく、保育実践に基づく園内研修を行うことが困難であることは指摘されてきた。また、指導的立場に立つ教員の不足も園内研修を困難にしている一因であった(中央教育審議会幼児教育部会「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」(答申), 2005)。

かかる問題に関して、保育カンファレンスや保育実践ビデオ活用などが提案されてきたが、幼稚園研修を有効に行うことを困難にしている原因の解決に必ずしも資する方法とは言えなかった。そこで、本研究では複数園の教師による協働を可能にするように、ICTを活用したネットワーク型研修システムの開発により、幼稚園研修の抱える問題の解決を図ろうとした。

2. 研究の目的

保育及び園内研修の問題の原因を同定し、その解決策を創出する研修プログラムの開発・評価を行い、少人数でも実効性のある研究プログラムであり同時にネットワークによる共同の可能性を明らかにすることを主たる目的とする。具体的には、以下のことを目的とする。

(1) 保育実践における問題、特に教師の実践できない保育の支援を明らかにし、園内研修の問題同定のプロセスを明らかにする。

(2) 幼稚園間の協働による研修を試行し、ネットワーク型研修システムの要件を明らかにする。

(3) ネット上での研修を想定し、それを可能にする幼稚園教師間の連携の課題を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 園内研修に関する問題点を明らかにするために、兵庫県内公立幼稚園園長3名および主任3名にインタビューを行う。インタビュー内容は、園内研修を行う際の工夫と問題点、園内研修における役割、自らの経験から保育の改善のために教師に何が必要とされるか、である。

(2) 保育指導案(日案、週案)および保育ビデオクリップを用いた複数幼稚園の教師による研究会を行い、会話を録音し、教師間の相互作用等をカテゴリー分析する。研究会の構成は、神戸市公立幼稚園園長、神戸市公立幼稚園主任教諭、神戸市公立幼稚園教諭、国立大学法人附属幼稚園研究主任、同教諭2名である。

(3) 電子黒板やホーム・クラウドコンピューティングを研究会において試用し、参加者による評価を行う。

4. 研究成果

(1) 園長3名、主任3名へのインタビューから逐語記録を作成し、そこに現れる内容をコード化、まとめた結果、保育の改善に関しては、多くの研究で示されてきたように、自らの保育実践のリフレクションが重要であることが指摘された。リフレクションにおいては、自らの支援・指導が問題とされるが、もっとも重要な点は子どもの様子からリフレクションすることであった。また、次の保育において問題があると考え子どもへの対応をどうするか、というフィードフォワード機能まで教師は考えることが重要であることが共通していた。教師のリフレクション・レベルとして 想起、合理性、反省性、が指摘されているが、幼稚園教師の場合、反省性のレベルが保育という特徴からより求められることを意味していると考えられた。

子どもの様子から考えることの重要性を踏まえ、園内研修あるいは園長による日常の教師への指導において、園長は各教師の保育を観察することが重要であることが明らかになった。すなわち、幼稚園の研修においては、その日の一人ひとりの子どもの様子に基づくという具体性が重要だということである。したがって、保育に関する研修において、子どもの活動(遊び)をどのように捉えるかが重要な鍵となることが示唆された。

一方、主任教諭が自らの職能発達において重要であったことのインタビューにおいて、子どもの様子から自らの保育を省察することがポイントであることは指摘されたが、同時に保育指導案についても言及された。指導案に保育計画すべてを書き込むことはできないが、指導案が子どもを捉えるものさしとして機能したり、自らの保育を考えたりする役割を果たしていたということであった。したがって、指導案から保育場面を他の教師が読み取るという行為は、子どもを捉える枠組みや保育観などの検討につながる可能性が示されたといえる。

(2) (1)の結果を受けて、指導案をリソースとした複数幼稚園の教師による検討会を実施した。その結果、指導案から各教師が保育場面を想定し、自らの保育に関する知識を表出することが示された。その知識の特徴として、保育における環境構成との関連で子どもの遊びが想定されることであった。したがって、複数幼稚園の協働における研修においては、どのような環境構成が行われているか、またその環境構成における制約条件は何かということを共有しておかなければならないことが示唆された。保育観察なしでも指導案に基づく検討は、各教師には有用であることが示唆された。

また、日案と週案という指導案が教師の資質向上に異なった機能をもつことが示唆された。日案は、一人ひとりの子どもをいかに支援していくか、それもたいへん具体的、状況的であり、日案の中では十分に表現できない、個々の子どもに対応した教師の実践に関

する知識の一部が表出されたものである。したがって、日案をリソースとした場合、話し合いが具体的、状況依存的になる傾向がみられた。一方、週案は子どもの発達に応じた保育の見取り図のようなものであり、日々の子どもの遊び(学び)を解釈する枠組みの働きをしているようであった。したがって、現実として、公立幼稚園では日案よりも週案を作成することが多いようであるが、指導案をリソースとしたネットワーク型研修においては日案と週案とを組み合わせるリソースとすることが求められると考えられた。

しかしながら、実施した研究会では指導案作成者が話し合いの中で指導案を補足する情報等を提供した。すなわち、指導案のみでは複数幼稚園の協働による研修リソースとしては不十分な部分があり、必要に応じて指導案作成の根拠となる情報の提供が必要であることも示された。

ネットワーク型の研修を考えるならば、日案と週案とをセットにした指導案データベースに指導案作成者からの子どもの状況などの情報を付加する必要であることが示唆された。

(3)保育ビデオクリップをリソースとした研究会では、保育実践者の行動の意図あるいはねらいが主として問題とされた。子どもに関する情報が乏しいために、ビデオから読み取れる子どもの反応を踏まえながら、「なぜ保育者は・・・?」ということの解釈の多様性が話し合いにみられた。これは、保育者の指導・支援の改善を考えるのではなく、それぞれの教師の保育観などが表出され、それらが問い直されていると考えられた。すなわち、一人ひとりの保育者としての考えが問われる研修となる可能性が示された。これは、自らの保育実践をビデオによりリフレクションすることでは深まりにくい様相であると考えられる。保育活動を構成していく際、暗黙裡に働いている教師自身の考え方が、少なくとも表出される可能性を示している。したがって、ビデオによる保育カンファレンスがややもすればその実践の問題点ということに対し、情報が乏しいがゆえにビデオクリップを用い、かつ複数幼稚園の教師による話し合いは、教師自身の考えに迫るという意味で教師自身の成長にかかわる研修につながる可能性を有していると考えられる。

また、ビデオで示された保育者が経験教師あるいは熟練教師である場合、保育技術の伝達という機能が、教職経験年数10年未満の教師にみられた。保育技術の伝達という点でもビデオクリップは有効であることが示唆された。

したがって、リソースとしてどのようなビデオクリップを選択するかによって成果は異なることが考えられるが、少なくとも保育ビデオクリップは研修のリソースとして有効であることが示唆された。

(4)電子黒板やホーム・クラウドコンピューティングに関しては、現実に活用するには制約条件が多かった。研究会でも試用したが、ICT機器を使用する教師のスキルレベル、各幼稚園におけるネットワーク環境の整備状況など、ハード・ソフト両面においてまだ実用できる段階ではないことが示された。

しかしながら、本研究で示唆されたように、指導案や保育ビデオクリップが研修リソースとして有効であることから、複数幼稚園で活用できる指導案及び保育ビデオクリップのデータベース化を進めることが幼稚園研修の問題解決の第一歩と考えられる。なお、ビデオクリップは10分程度が適切と考えられた。それ以上長い場合、話し合いの焦点が拡散し、話し合いが冗長になることが示唆された。

以上から、ネットワーク型幼稚園研修を指導案、ビデオクリップをリソースとして行うことは有効であると示唆された。実際に行うとなると技術的には可能であるが、ネットワーク環境などの制約条件を解決することが現実には必要である。

以下にネットワーク型研修システムのイメージを示す。

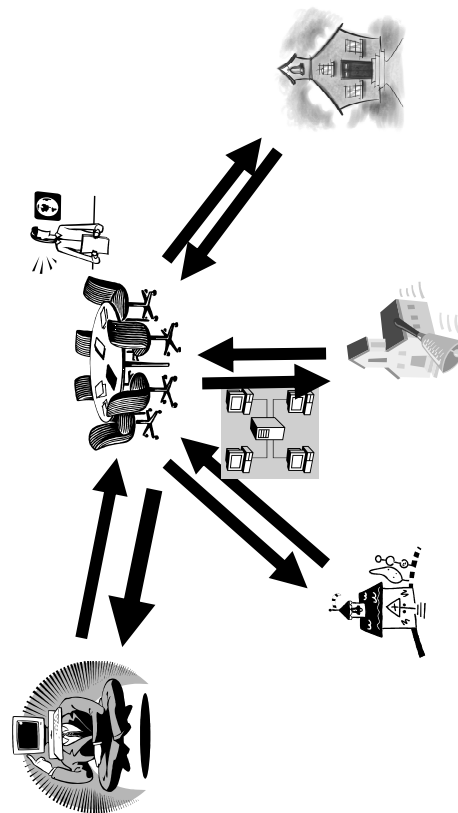


図 ネットワーク型研修システム

バーチャルな研修会を組織し、各幼稚園からネットワークを介して参加する。研修リソ

ースは、指導案及び保育ビデオクリップがデータベース化され、そのデータベースから研修参加者によって選択される。研修会においては、話し合いをマネジメントする役割は果たす存在が不可欠であり、インタープリター兼マネジャーと言える。話し合いの成果は、各園にフィードバックされるだけでなく、データベースにもフィードバックされ、継続的使用によって研修内容が深まることが想定される。

(5) 試行的に実施した研究会において、その有効性を高める要因として、話し合いのマネジメントが顕著になった。複数幼稚園から構成されたメンバーであっても、教師間の話し合いは具体的、あるいは各幼稚園の文脈に依存する傾向がみられ、各幼稚園での情報交換が主になりがちである。したがって、本研究で示されたような話し合いとなるためには、話し合いのマネジメントが必要である。本研究では大学教員がその役割を果たし、批判的(論理的)な問いを投げかけていた。これは、知識経営モデルにおけるインタープリターの役割に似ていると考えられる。各メンバーが表出する各幼稚園の文脈に依存した保育に関する知識を全員が共有化できるように解釈し、それを問いという形で示すということである。これはメンターとしての役割の一部としてとらえることもできるだろう。すなわち、幼稚園研修の問題点としてあげられた指導的役割を果たす教師の存在が必要であることが示されたといえる。したがって、ネットワーク型研修においても同様の役割を果たすメンバーをどのように確保するかは大きな課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 2件)

Tadashi Asada, Kokoro Imamura. What do mentors learn through mentoring in Japanese induction program? European Conference for Educational Research at University of Port 2014.9.

Tadashi Asada, Kokoro Imamura. How do mentees evaluate their mentor's competencies in Japanese induction program? European Conference for Educational Research at University of Cadiz 2012.9

〔図書〕(計 1件)

Tadashi Asada Mentoring: Apprenticeship or Co-inquiry? in Fletcher, S.J. et al. (ed) The SAGE Handbook of Mentoring and Coaching in Education. SAGE 2012 542p.

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浅田 匡 (ASADA, Tadashi)
早稲田大学・人間科学学術院・教授
研究者番号：00184143

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：